

公共図書館における「読み聞かせ」に参加する乳幼児と保護者の実態

水谷 亜由美 中村 哲也 濱千代 いくみ 藤田 万喜子
岐阜聖徳学園大学教育学部

The actual conditions of infants and guardians participating in
“yomikikase” in public libraries

Ayumi MIZUTANI, Tetsuya NAKAMURA, Izumi HAMACHIYO,
Makiko FUJITA

Abstract

The purpose of this paper is to examine the actual conditions of infants and guardians participating in “yomikikase” in public libraries. We conducted a questionnaire survey at four public libraries. Infants and guardians took part in the “yomikikase” initiated by the information sent from the library. Guardians expected their infants to like picture books. Infants and guardians often do “yomikikase” at home. Half of the picture books used for “yomikikase” at home were borrowed from the library. Many guardians made their own decisions by looking at picture books. For infants around the age of three, the meaning of a picture book changed from simple to cultural. Many guardians said that, by participating “yomikikase” in the library, the number of “yomikikase” at home has increased. It was suggested that guardians’ awareness was closely related to the concept of the library, and the experience at the library also affects home life.

Key words : *yomikikase*, public libraries, infants and guardians, picture book, home

I. はじめに

本稿の目的は、図書館の読み聞かせに参加する保護者は、読み聞かせに対してどのような意識を持っているのか、家庭で読み聞かせをどのように実践しているのかについて把握することである。

幼稚園教育要領の領域「言葉」には、その内容の一つに「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」¹⁾ことが示されている。絵本の読み聞かせは、保育者と子どもたちの信頼関係の上に積み重ねられる共有体験（一体感）²⁾ができると考えられ、園生活において重要な時間と捉えられている。季節の行事や保育活動とのつながりが意識され、イメージの世界の広がりや生活の知識を伝えるために、日常的に読み聞かせが行われていることが報告されている³⁾。

子どもの絵本や物語との出会いは、家庭生活から始まる。子どもの絵本の出会いを支える活動の一つに、ブックスタート⁴⁾という活動があり、参加することで保護者の読み聞かせへの意識が変容するといわれている⁵⁾。ブックスタートには、図書館の利用の増加、母親のストレスの軽減等の効果が見られるとの報告⁶⁾や、読み聞かせを実施する保護者は、子どもの力の大きさに気付き、子育てへの自信の高まりや子どもとのやりとりを楽しむ感情の生起があるとの報告がなされている⁷⁾。子どもの言葉の力の育ちに関しては、母子間で共有された言語情報が子どもの中で定着する⁸⁾ともいわれ、読み聞かせへの注目は高まっているといえよう。岐阜県内においても、ブックスタートや図書館、子育て支援センターにおける読み聞かせ活動が積極的に実施されており、読み聞かせを通して子どもの育ちや親子のコミュニケーションを支えようとする動きが広まってきている。しかし、図書館の場における読み聞かせの意義や家庭への影響についての研究は十分になされているとはいえない。そこで、本学の近隣地域の公共図書館における読み聞かせに参加する保護者にアンケート調査を実施し、読み聞かせに対する意識と家庭での読み聞かせの実態、読み聞かせ活動への参加が家庭に与える影響について把握することとした。乳幼児の言葉に対する感覚を豊かにするとされる読み聞かせの意義や魅力を、乳幼児の保護者や保育者にどのように伝えていくのかを検討する足掛かりとしたい。

II. 調査の概要

1. 調査及び分析の方法

調査は、2019年9月～2020年2月に、子どもの読書活動を推進し、ブックスタートや読み聞かせ活動に積極的な取り組みを行っている本学近郊4つの公共図書館で行った。乳幼児を対象とする読み聞かせに参加し読み手と参加者の様子を参与観察するとともに、参加していた保護者にアンケート調査を実施した。読み聞かせ直後にアンケート用紙を配布し、その場で回収した。回収率は100.0%であった。本稿では、アンケート調査で得られた結果を中心に報告し、観察で得られた情報は、考察を深めるために用いた。アンケートで得られたデータは統計的に処理し、保護者の全体的な傾向と図書館の取り組みとの関連について考察を行った。データは、全体的な傾向の他、図書館別の統計、子どもの年齢別の統計、読み聞かせ活動への参加回数別に集計したが、本稿では保護者の意識や実態の傾向が顕著に見られた統計を取りあげ考察する。各表には回答人数とその割合を示すが、割合は小数第2位を四捨五入しているため、各項目の割合の合計が100.0%になるとは限らない。

本調査は、岐阜聖徳学園大学研究倫理審査委員会における承認を得ている。図書館の館長と読み聞かせの担当者に文書と口頭で説明し、同意を得た上で実施した。参加者に関しては、アンケート配布時に文書と口頭で説明を行い、回答の提出をもって同意したものとみなした。本稿で扱う「読み聞かせ」は、絵本の読み聞かせに限らず、紙芝居やエプロンシアター、パネルシアター、素話（語り・ストーリーテリング）などのおはなし、わらべ歌・子守り歌、手遊び・身体遊びなどの活動を含む。

2. 図書館の概要

調査を実施した4つの図書館における読み聞かせ活動の概要は、次の通りである。HPによる情報と観察時に図書館職員から伺った内容をもとにまとめた。（感染症拡大防止のため、2020年度は実施を控えている場合もある。）

(1) 岐阜県図書館（略称：岐阜県）

岐阜県図書館は、県の中核図書館としての役割を担っている。そのため、要請に応じて、子どもの本の読み聞かせ講座などの出前講座があり、県図書館の職員が講義も行っている。同館の読み聞かせ活動は、職員によるものとお話しサポーターによるものがある。児童コーナーの奥に「おはなし室」があり、ここで、毎月第2木曜日（乳幼児対象）に職員の方が、毎月第1・3日曜日（幼児から小学校低学年対象）及び毎月第2土曜日（小学生対象）におはなしサポーターの方が、おはなし会を開き、読み聞かせを行っている。このほか、毎月第1土曜日にことばあそびとおはなし会、毎月第2火曜日に手作り絵本の会「しぶ柿」によるおはなし会、偶数月第3日曜日に英語などのおはなし会がある。また、不定期開催であるがストーリーテリングもある。いずれも30分間で、その日の読み聞かせの絵本などを展示して紹介をしている。活動の特色として男性職員の読み聞かせ参加があげられる。第2木曜日の読み聞かせに参加の他、父親の育児参加や子育て世代の図書館利用を促す目的で開催される「パパと過ごす図書館」にも参加している。このほか、「こどもの読書週間」中に、「お父さんお母さんのための読み聞かせ講座」の実施も行っている。

(2) 大垣市図書館（略称：大垣市）

大垣市図書館は、大垣市立図書館と上石津図書館、墨俣図書館の3つがあり、各館において「おひぎでだっこ」と「おはなしの時間」が定期的に行われている。「おひぎでだっこ」は、3歳児くらいまでの家族を対象とし、大垣市立図書館では毎月第1土曜日と毎週水曜日、上石津図書館は毎週木曜日、墨俣図書館は毎週金曜日に、30分間のプログラムで実施されている。読み手となる読み聞かせ指導員や図書館職員は、4か月児健康診査時に行われる「ブックスタート」にも携わっており、図書館での読み聞かせとのつながりが図られている。わらべ歌や手遊びと絵本を取り入れたプログラムは3館で統一され、1ヶ月間は同一の内容となっている。また、「おはなしの時間」は、特定の対象はなく「誰でも参加できます」とうたっている。大垣市立図書館は毎週土・日曜日、上石津図書館と墨俣図書館は毎月第2・4土曜日に実施される。1回あたり約30分であり、ボランティアや図書館職員が読み手となり、連携をとりながら実施されている。

そのほかにも、大垣市立図書館では、素話を取り入れた「かたりの時間」や季節にまつわるおはなしを集めた「季節のおはなし会」、保護者の方に読み聞かせの楽しさを伝える「赤ちゃん和妈妈のための

おはなし・わらべ歌」等の活動も行われている。

(3) 各務原市立中央図書館・川島ほんの家 (略称：各務原市)

各務原市では中央図書館と川島ほんの家、中央ライフデザインセンター図書室、もりの本やさん(森の交流館)で読み聞かせが行われている。取材は各務原市の中核図書館である中央図書館と、旧川島町の中核図書館である川島ほんの家で実施した。中央図書館と川島ほんの家ではボランティアや図書館職員が読み手となり、1回あたり30分の時間で、定期的に絵本や紙芝居の読み聞かせが行われている。中央図書館の1階にある「おはなしのへや」では、毎月第1・3水曜日、第1～4木・土曜日、第2日曜日に「よみきかせ」が実施され、主として乳幼児と保護者が参加している。川島ほんの家では毎週土曜日に「たのしいおはなしのじかん」が実施され、主として幼児や小学生が参加している。取り上げる絵本や紙芝居の選択と並び順は、読み手に任されているので、実施日によって異なる。中央図書館では毎月第3金曜日に「英語絵本の読み聞かせ」も実施される。参加した子どもたちはカードにスタンプを押してもらい、スタンプが10個たるとミニ賞状がプレゼントされる。このような定期の読み聞かせのほかに、中央図書館では4階にある多目的ホールで読み聞かせのイベントが開催される。「みんなのおはなし会」は読み手のボランティアの交流の場にもなっている。「クリスマスのおたのしみ会」には地元の高校生・合唱団・国際交流員の方々が出演し、読み聞かせのほか、合唱やペープサート(紙人形劇)などが披露される。川島ほんの家では「季節のおはなし会」が企画されている。

(4) 羽島市立図書館 (略称：羽島市)

羽島市立図書館は、ボランティアが担い手となって、「赤ちゃんタイム」と「おはなしひろば」を定期的に開催している。「赤ちゃんタイム」は、「赤ちゃん連れでも気兼ねなくご来館いただけます」と呼びかけ、乳幼児とその保護者を対象に、毎月第1・3水曜日、午前10時30分～正午、1階「おはなしコーナー」で、手遊びやうたを取り入れた、読み聞かせ活動を行っている。また、「おはなしひろば」は、「お友達と一緒に楽しい時間を過ごしましょう!」とうたい、幼児、小学校・義務教育学校の1～3年生を対象として、毎月第2・4土曜日(奇数月午後2時～3時、偶数月午前10時30分～11時30分)、「赤ちゃんタイム」と同様、1階「おはなしコーナー」で、読み聞かせを中心として、紙芝居、手遊び、腹話術、エプロンシアターなども交えた活動を行っている。

以上のように、各図書館における読み聞かせは、子どもの読書活動の推進に加え、絵本を介したコミュニケーションの場を設け、地域の中で安心して楽しく子育てが行えるよう、子育て支援の一環としても実施されている。

III. 結果と考察

1. 調査協力者の概要

アンケート調査への協力者は、合計112人であった。図書館ごとの内訳は、「岐阜県」が31人(27.7%)、「大垣市」が42人(37.5%)、「各務原市」が19人(17.0%)、「羽島市」が20人(18.0%)となった。そのうち母親が101人(90.2%)であった。核家族家庭(101人、90.2%)と、第1子(78人、70.0%)の参加が多いという特徴も見られた。参加回数は「初めて」が35人(31.3%)、「2～3回」が25人(22.3%)、「4～6回」が16人(14.3%)、「7～9回」が7人(6.3%)、「10回以上」が29人(25.9%)であった。参加している子どもの年齢は、2か月から5歳児までと幅広いが、1歳児が41人(36.6%)と最多で、0歳児が33人(29.5%)と続いた。なお、小学生の保護者による回答も得られたが、乳幼児の家庭の状況を把握する目的であるため、今回の調査結果には含めなかった。

2. 図書館における読み聞かせに参加した契機と保護者の期待

図書館で催されている読み聞かせに参加するようになった契機について尋ねた結果をまとめたものが表1である。複数回答可能な質問であったため延べ人数を図書館ごとに整理し、人数と各図書館の合計人数に対する割合を示した。

きっかけは、「図書館が発信する情報で知った」が最も多く68人(58.1%)であった。これを図書館ごとに見ると、「岐阜県」が26人(83.9%)で参加者の8割で、次いで、「各務原市」が13人(61.9%)、そして、「大垣市」が19人(43.2%)、「羽島市」が10人(47.7%)となっている。

表1 図書館における読み聞かせへの参加契機（人数（％））

| きっかけ | 図書館 | | | | |
|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| | 岐阜県 | 大垣市 | 各務原市 | 羽島市 | 全館合計 |
| ブックスタートで紹介された | 0(0.0) | 17(38.7) | 3(14.3) | 3(14.3) | 23(19.7) |
| 友人や知人から紹介された | 1(3.2) | 2(4.5) | 3(14.3) | 4(19.0) | 10(8.5) |
| 図書館の発信する情報で知った | 26(83.9) | 19(43.2) | 13(61.9) | 10(47.7) | 68(58.1) |
| その他 | 4(12.9) | 6(13.6) | 2(9.5) | 4(19.0) | 16(13.7) |
| 合計 | 31(100.0) | 44(100.0) | 21(100.0) | 21(100.0) | 117(100.0) |

次いで多かったきっかけは「ブックスタートで紹介された」で、23人（19.7％）であった。これを同じく図書館ごとに見ると、「大垣市」が17人（38.7％）で最も多く、「各務原市」と「羽島市」の図書館は同数で3人（14.3％）、「岐阜県」は0人（0.0％）であった。この結果の要因は、地域の行政が実施する「ブックスタート」との連携にある。「岐阜県」はその連携がないため0人（0.0％）である。ここに「岐阜県」と地域の図書館との役割の違いを見ることが出来る。では連携のある3図書館を見ると、「大垣市」は「図書館が発信する情報で知った」より少し割合が減るものの4割近い人が「きっかけ」だと認識しており、連携の成果が見られる。残りの図書館においては、3人（14.3％）と保護者の認識が低く、連携が生きて働いていない。保護者、ブックスタート、図書館の三者で連携に対する共通理解と意味付けが必要なのかも知れない。

その他の中には、図書館に来たら偶然実施されていたため、図書館のスタッフの方が呼びかけてくれたためという回答があった。

以上から、図書館の情報発信や行政の取り組み（ブックスタート）が重要であることが分かる。

表2 図書館における読み聞かせへの期待（人数（％））

| 期待 | 図書館 | | | | |
|----------------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|
| | 岐阜県 | 大垣市 | 各務原市 | 羽島市 | 全館合計 |
| 保護者同士で交流すること | 3(4.3) | 10(9.2) | 2(5.6) | 8(15.4) | 23(8.6) |
| 保護者と子どもがふれあうこと | 8(11.4) | 22(20.2) | 4(11.1) | 12(23.1) | 46(17.2) |
| 子どもの言葉が発達すること | 17(24.3) | 19(17.4) | 5(13.9) | 8(15.4) | 49(18.4) |
| 子どもが絵本を好きになること | 29(41.4) | 37(34.0) | 17(47.2) | 17(32.7) | 100(37.5) |
| 読み聞かせのコツを知ること | 7(10.0) | 13(11.9) | 5(13.9) | 4(7.7) | 29(10.8) |
| その他 | 6(8.6) | 8(7.3) | 3(8.3) | 3(5.7) | 20(7.5) |
| 合計 | 70(100.0) | 109(100.0) | 36(100.0) | 52(100.0) | 267(100.0) |

表2は、図書館における読み聞かせへの保護者の期待について調査したものである。複数回答可能な質問であるため延べ人数を図書館ごとに整理し、人数と各図書館の合計人数に対する割合を示した。

この表から、保護者が最も期待していることは、「子どもが絵本を好きになること」で100人（37.5％）である。これを図書館ごとに見ると、「岐阜県」と「各務原市」は4割台で、「羽島市」と「大垣市」は3割台である。次いで多いのは「子どもの言葉が発達すること」の49人（18.4％）である。これらに関わってその他の回答に「いろんなジャンルの絵本を知る」「子どもの世界を広げたい」「人の話が聞けるように」などがあり、子どもの成長に良い影響をもたらすことを願っている。次いで多いのは「保護者と子どもがふれあうこと」の46人（17.2％）で、これに「保護者同士で交流すること」の23人（8.6％）を合わせると、69人（25.8％）となり、また、その他の回答に「子どもと子どもとのふれあい」「他の赤ちゃんとのふれあい」などもあり、交流を期待していることが分かる。交流に関して、図書館ごとに見ると、「大垣市」と「羽島市」が多く、前者が32人（29.4％）、後者は20人（38.5％）となっている。一方、「岐阜県」と「各務原市」は、前者が11人（15.7％）、後者は6人（16.7％）となっている。「大垣市」と「羽島市」においては交流を期待し、「岐阜県」と「各務原市」においては絵本を通しての成長を期待しているというように傾向がわかれた。図書館のコンセプトや地域性が要因するのもかも知れないが、この傾向は今回の調査結果として特筆すべき点といえる。

3. 参加者の家庭での読み聞かせ・歌遊びの頻度の実態

参加者が家庭でどのくらいの読み聞かせを実施しているのかを表したものが表3である。参加回数ごとに整理し、人数と回数ごとの合計人数に対する頻度の割合を示した。

表3 家庭で読み聞かせをする頻度（人数(%)）

| 参加回数 実施頻度 | 初めて | 2～3回目 | 4～6回目 | 7～9回目 | 10回以上 | 合計 |
|--------------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|
| 毎日 | 18(51.4) | 13(52.0) | 10(66.7) | 3(42.9) | 21(75.0) | 65(59.1) |
| 数日に1回程度 | 14(40.0) | 6(24.0) | 4(26.7) | 3(42.9) | 6(21.4) | 33(30.1) |
| 週に1回程度 | 1(2.9) | 6(24.0) | 1(6.7) | 1(14.3) | 0(0.0) | 9(8.2) |
| 月に1回程度 | 1(2.9) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(0.9) |
| ほとんどない | 1(2.9) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(3.6) | 2(1.9) |
| 合計 | 35(100.0) | 25(100.0) | 15(100.0) | 7(100.0) | 28(100.0) | 110(100.0) |

家庭で毎日読み聞かせをしている人は、全体で65人(59.1%)である。数日に1回も含めると、98人(89.2%)が頻繁に絵本の読み聞かせを実施している。さらに、読み聞かせの実践が「ほとんどない」と答えた人は、全体で2人(1.9%)と少数であったことから、子どもにとって絵本に触れる機会は図書館での読み聞かせの場だけではないことが分かる。また、「10回以上」参加した人の内、21人(75.0%)が「毎日」と回答し、読み聞かせの頻度が最も多い。参加回数と実施頻度との関連も見られる⁹⁾が、「初めて」の参加者の内18人(51.4%)が「毎日」と回答していることから、もともと読み聞かせへの関心が高く、読み聞かせを子育てに取り入れている人が読み聞かせに参加していると推察される。

次に、参加者が家庭でどのくらいわらべ歌や子守り歌、身体遊びを実施しているのかを表したものを表4として示す。読み聞かせと同様、参加回数ごとに整理し、人数と回数ごとの合計人数に対する頻度の割合を示した。

表4 家庭でわらべ歌や子守り歌、身体遊びをする頻度（人数(%)）

| 参加回数 実施頻度 | 初めて | 2～3回目 | 4～6回目 | 7～9回目 | 10回以上 | 合計 |
|--------------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|
| 毎日 | 17(48.6) | 15(62.5) | 6(40.0) | 6(85.7) | 17(60.7) | 61(56.0) |
| 数日に1回程度 | 13(37.1) | 6(25.0) | 5(33.3) | 0(0.0) | 7(25.0) | 31(28.4) |
| 週に1回程度 | 3(8.6) | 2(8.3) | 1(6.7) | 0(0.0) | 2(7.1) | 8(7.3) |
| 月に1回程度 | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(13.3) | 0(0.0) | 1(3.6) | 3(2.8) |
| ほとんどない | 2(5.7) | 1(4.2) | 1(6.7) | 1(14.3) | 1(3.6) | 6(5.5) |
| 合計 | 35(100.0) | 24(100.0) | 15(100.0) | 7(100.0) | 28(100.0) | 109(100.0) |

わらべ歌や子守り歌、身体遊びを「毎日」実施している人は、全体の61人(56.0%)である。「数日に1回」も含めると、92人(84.4%)が頻繁に実施しており、普段からわらべ歌や子守り歌を家庭で実践しているといえる。「初めて」の参加者も17人(48.6%)が「毎日」と回答しており、わらべ歌や子守り歌、身体遊びに興味のある人が読み聞かせに参加していることが窺える。実施が「ほとんどない」と答えた人は、読み聞かせが2人(1.9%)であるのに対し、わらべ歌や子守り歌、身体遊びの場合は6人(5.5%)である。「7～9回」や「10回以上」の参加者も「ほとんどない」と回答している人がいる。読み聞かせよりも家庭に取り入れることに難しさがある状況が推察される。「大垣市」では、読み聞かせ終了時に、実施した手遊びやわらべ歌の歌詞や絵本の情報を記載したプリントを配布しているが、図書館での体験に終わらず、家庭につなげる配慮も求められているといえる。

このように、読み聞かせへの参加者は、もとより絵本の読み聞かせやわらべ歌や子守り歌、身体遊びなどに関心が高いことが窺え、図書館だけではなく家庭でも頻繁に実施している。

4. 参加者の図書館の絵本の使用状況と絵本の選定の実態

第一に、読み聞かせ参加者が図書館の絵本をどの程度使用しているかについてアンケート結果を見ることにする。図書館ごとに整理したのが表5である。使用の程度ごとの人数とその割合を基にして、よく使用する程度から累積した人数と累積した割合を計算して示した。参加回数ごとに整理したのが表6である。全体（108人）に対する割合を計算して示した。

表5 図書館ごとの参加者による図書館の絵本使用状況（人数(%)）

| 使用程度 \ 図書館 | 岐阜県 | 岐阜県 累計 | 大垣市 | 大垣市 累計 | 各務原市 | 各務原市 累計 | 羽島市 | 羽島市 累計 | 全館 | 全館 累計 |
|------------|-------------|---------------|--------------|---------------|-------------|---------------|--------------|---------------|--------------|----------------|
| ほぼ図書館の絵本 | 9 (31.0) | 9 (31.0) | 5 (12.2) | 5 (12.2) | 5 (26.3) | 5 (26.3) | 3 (15.8) | 3 (15.8) | 22 (20.4) | 22 (20.4) |
| 4分の3程度 | 2 (6.9) | 11 (37.9) | 6 (14.6) | 11 (26.8) | 1 (5.3) | 6 (31.6) | 0 (0.0) | 3 (15.8) | 9 (8.3) | 31 (28.7) |
| 半分程度 | 8 (27.6) | 19 (65.5) | 13 (31.7) | 24 (58.5) | 5 (26.3) | 11 (57.9) | 6 (31.6) | 9 (47.4) | 32 (29.6) | 63 (58.3) |
| 4分の1程度 | 3 (10.3) | 22 (75.8) | 7 (17.1) | 31 (75.6) | 0 (0.0) | 11 (57.9) | 0 (0.0) | 9 (47.4) | 10 (9.3) | 73 (67.6) |
| ほぼ図書館以外 | 7 (24.1) | 29 (100.0) | 10 (24.4) | 41 (100.0) | 8 (42.1) | 19 (100.0) | 10 (52.6) | 19 (100.0) | 35 (32.4) | 108 (100.0) |

表5でまず、全体の傾向を見ることにする。全館合計では「ほぼ図書館以外」の絵本を使用している人が35人（32.4%）と最も多く、3分の1程度に相当する。その一方で「半分程度」図書館の絵本を使用する人が32人（29.6%）、「ほぼ図書館の絵本」を使用する人が22人（20.4%）というように、図書館の絵本を使用している人もかなり多く存在する。「半分程度」までの全館累計使用者は63人（58.3%）である。

次に、図書館ごとの傾向を見ることにする。「岐阜県」は「ほぼ図書館の絵本」を使用する人が9人（31.0%）、「半分程度」までの累計使用者が19人（65.5%）というように、図書館の絵本を使用する率が高い。「各務原市」は「半分程度」までの累計使用者が11人（57.9%）と全館累計に近いが、「ほぼ図書館以外」の絵本を使用する人が8人（42.1%）存在する。「各務原市」は図書館の絵本を使用している層とそうでない層とに分かれている。「羽島市」は「半分程度」までの累計使用者が9人（47.4%）と他館に比較して低く、「ほぼ図書館以外」の絵本を使用する人が10人（52.6%）と半数以上存在する。「羽島市」の読み聞かせ参加者は、図書館の絵本を使用すること以外の、なんらかの目的で図書館を活用しているようである。「大垣市」の場合、「ほぼ図書館の絵本」を使用する人は5人（12.2%）と他館に比較して少ないが、「4分の3程度」「半分程度」「4分の1程度」図書館の絵本を使用する人が多く存在する。それゆえ、「4分の1程度」までの累計使用者は31人（75.6%）となり、「岐阜県」の累計使用者の割合とほぼ等しくなる。「大垣市」は図書館の絵本との併用が進んでいるようである。

表6 参加回数ごとによる図書館の絵本使用状況（人数(%)）

| 使用程度 \ 参加回数 | 初めて | 2～3回目 | 4～6回目 | 7～9回目 | 10回以上 | 合計 |
|-------------|----------|----------|----------|---------|----------|------------|
| ほぼ図書館の絵本 | 7(6.5) | 4(3.7) | 3(2.8) | 2(1.9) | 6(5.6) | 22(20.4) |
| 4分の3程度 | 1(0.9) | 3(2.8) | 1(0.9) | 0(0.0) | 4(3.7) | 9(8.3) |
| 半分程度 | 6(5.6) | 9(8.3) | 6(5.6) | 2(1.9) | 9(8.3) | 32(29.6) |
| 4分の1程度 | 3(2.8) | 3(2.8) | 1(0.9) | 0(0.0) | 3(2.8) | 10(9.3) |
| ほぼ図書館以外 | 17(15.7) | 4(3.7) | 4(3.7) | 3(2.8) | 7(6.5) | 35(32.4) |
| 合計 | 34(31.5) | 23(21.3) | 15(13.9) | 7(6.5) | 29(26.9) | 108(100.0) |

表6で読み聞かせ参加者の参加回数を見ると、「初めて」が34人(31.5%)と最も多いが、「2～3回目」が23人(21.3%)、「10回以上」が29人(26.9%)というように、リピーターが多く存在している。「ほぼ図書館以外」の絵本を使用している人の合計35人(32.4%)の中で、「初めて」の参加者が17人(15.7%)と最も多い。そして、「初めて」の合計の中でも「ほぼ図書館以外」の絵本を使用している人が最も多い。「初めて」の読み聞かせ参加者は図書館の絵本を使用していない傾向が見られる。参加回数の増加に伴い図書館の絵本の使用が増加するというような関係は見られない。しかし、「初めて」の参加者に比較してリピーターは図書館の絵本を使用している。

第二に、読み聞かせ参加者がどのようにして絵本を選定しているかについて、図書館総合のアンケート結果を見ることにする。入手の方法ごとに整理したのが表7である。入手の観点ごとに整理したのが表8である。ともに複数の回答が可能であったので、延べ人数により集計してある。なお、図書館別の相違は明確に表れなかった。

表7 入手方法による絵本選定の実態

| 入手方法 | 人数 (%) |
|--------------------|------------|
| 図書館の読み聞かせで勧められた絵本 | 22(12.6) |
| 図書館の掲示や配布物で知った絵本 | 11(6.3) |
| 図書館でみつけた絵本 | 70(40.2) |
| 書店やインターネットでみつけた絵本 | 46(26.4) |
| 友人・知人から紹介された絵本 | 12(6.9) |
| 保育所や幼稚園などから持ち帰った絵本 | 13(7.5) |
| 合計 | 174(100.0) |

表8 入手観点による絵本選定の実態

| 入手観点 | 人数 (%) |
|-----------|------------|
| 子どもの年齢、月齢 | 75(37.3) |
| 季節 | 32(15.9) |
| 基本的な生活習慣 | 16(8.0) |
| 子どもの興味関心 | 78(38.8) |
| 合計 | 201(100.0) |

表7で絵本の入手方法を見ると、「図書館でみつけた絵本」を選ぶ人が70人(40.2%)と多く、「書店やインターネットでみつけた絵本」を選ぶ人が46人(26.4%)で続いている。共通するのは読み聞かせ参加者が絵本を能動的に選定している点である。「図書館の読み聞かせで勧められた絵本」「友人・知人から紹介された絵本」「保育所や幼稚園などから持ち帰った絵本」のように他者から勧められた絵本を選ぶ人は多くない。絵本を入手するにあたって図書館が選定の場となっている人は全部で103人(59.2%)存在する。読み聞かせ参加者は、読み聞かせ担当者をはじめとする他者から勧められた絵本よりも、自ら目にしたり手に取ったりして確認のできた絵本を選定しているようである。図書館は絵本選定の場として機能している。

表8で絵本の入手観点を見ると、「子どもの興味関心」を基準に絵本を選ぶ人が78人(38.8%)、「子どもの年齢、月齢」を基準に絵本を選ぶ人が75人(37.3%)と多い。読み聞かせ参加者が絵本選定で重視する観点は子どもの現在の実態である。

以上、読み聞かせ参加者における図書館の絵本の使用状況と絵本選定の実態について分析した。

読み聞かせ参加者で図書館の絵本を「半分程度」まで使用している者は約6割存在し、図書館ごとに使用傾向が異なっている。「初めて」の参加者は図書館の絵本を使用していない傾向が見られるが、「初めて」の参加者に比較してリピーターは図書館の絵本を使用している。読み聞かせ参加者は他者から勧められた絵本よりも、子どもの現在の実態にあった絵本を選定する。その際には自ら目にしたり手に取ったりして確認のできた絵本を選定していると推量される。図書館は絵本選定の場として機能しているので、図書館が読書推進に果たす役割は今後も大きい。

5. 家庭での読み聞かせの実態と読み聞かせへの参加による変容

おはなし会(読み聞かせ)参加者が、家庭に帰って読み聞かせをした際の子どもの様子や反応について、子どもの年齢段階とアンケート項目で整理したものが、表9である。複数回答が可能な質問で、年齢段階に応じて、アンケート項目ごとの延べ人数とその割合を示している。

表9に基づき、家庭での読み聞かせに対する乳幼児の様子についてまとめると次のようになる。

まず、生後5か月までの乳児の様子に関して、「好きなページをじっと見ている」ことに気づく保護

表9 保護者が捉えた家庭での読み聞かせにおける子どもの行動（人数(%)）

| 年齢段階(◇歳；△か月) | 0;0～0;5 | 0;6～0;11 | 1;0～1;5 | 1;6～1;11 | 2;0～2;5 | 2;6～2;11 | 3;0～3;11 | 4;0～5;11 | 合計 |
|-------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| アンケート項目 | | | | | | | | | |
| 読んで欲しいと要求する | 1 (8.3) | 3 (7.1) | 15 (21.4) | 14 (23.0) | 12 (23.1) | 6 (16.7) | 10 (22.7) | 5 (29.4) | 66 (19.8) |
| 自分でページをめくっていく | 2 (16.7) | 15 (35.7) | 22 (31.4) | 17 (27.9) | 13 (25.0) | 8 (22.2) | 9 (20.5) | 2 (11.8) | 88 (26.3) |
| 好きなページをじっと見ている | 6 (50.0) | 14 (33.3) | 6 (8.6) | 6 (9.8) | 3 (5.8) | 1 (2.8) | 1 (2.3) | 0 (0.0) | 37 (11.1) |
| 違う遊びを要求する | 0 (0.0) | 2 (4.8) | 3 (4.3) | 2 (3.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 7 (2.1) |
| 目の前から絵本を退ける | 0 (0.0) | 1 (2.4) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (2.8) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (0.6) |
| 絵本を見ないが、お話は聞いている | 1 (8.3) | 1 (2.4) | 2 (2.9) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (2.8) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 5 (1.5) |
| 指さしをする | 1 (8.3) | 6 (14.3) | 15 (21.4) | 10 (6.4) | 11 (21.2) | 4 (11.1) | 7 (15.9) | 3 (17.6) | 57 (17.1) |
| 読み手の言葉を復唱する | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (1.4) | 3 (4.9) | 2 (3.8) | 6 (16.7) | 4 (9.1) | 1 (5.9) | 17 (5.1) |
| 話の一部を覚えて声に出す | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 3 (4.3) | 6 (9.8) | 7 (13.5) | 2 (5.6) | 6 (13.6) | 4 (23.5) | 28 (8.4) |
| お話の内容に関する問いかけに答える | 1 (8.3) | 0 (0.0) | 3 (4.3) | 2 (3.3) | 3 (5.8) | 4 (11.1) | 5 (11.4) | 1 (5.9) | 19 (5.7) |
| 自分から絵本以外の言葉も発する | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (1.6) | 1 (1.9) | 3 (8.3) | 2 (4.5) | 1 (5.9) | 8 (2.4) |
| 合計 | 12 (100.0) | 42 (100.0) | 70 (100.0) | 61 (100.0) | 52 (100.0) | 36 (100.0) | 44 (100.0) | 17 (100.0) | 334 (100.0) |

者が多いことが分かる(50.0%)。生後6か月から11か月は、「指さしをする」(14.3%)、「自分でページをめくっていく」(35.7%)乳幼児がかなり多くなっている。

次に、1歳から1歳5か月の乳幼児では、「指さしをする」がさらに増え、同時に、「自分でページをめくっていく」(31.4%)ことと「読んで欲しいと要求する」(21.4%)ことが、保護者にとってかなり目につく行動となっている。この「読んで欲しいと要求する」は、1歳以降、顕著に増加していくが、「自分でページをめくっていく」という乳幼児の様子は徐々に減っている。

この点から、乳幼児にとって「絵本」というものが、それまで、みつめたり、指さしたり、めくって遊ぶ「興味を引く物=対象」であったものから、1歳頃を境として、「読んでもらうもの」へと変化しはじめていると考えられる。つまり、絵本は「ひとつの文化的なものだ」ということがなんとなく理解できていく萌芽期といえる。2歳代でも、指さしや読み手の言葉のやりとりが主であり、2歳後半では「読み手の言葉を復唱する」は、16.7%である。この時期の特徴のひとつは、絵本で知っているものを指さし、本を読んで欲しいとせがみながら、絵本を仲立ちとした読み手(=保護者)と聞き手(=乳幼児)の情緒的な交流が中心となっていることだと考えられる。

ところで、1歳代後半から、「読み手の言葉を復唱する」点に、保護者が気づいているが、これは、2歳代後半で最も多くなり(16.7%)、3歳代(9.1%)、4・5歳代(5.9%)と減少していく。これに対して、「話の一部を覚えて声に出す」という幼児の行動は、1歳代後半(9.8%)から4・5歳代(23.5%)にかけ徐々に増えていく傾向が見られる。したがって、1歳代から2歳代までの「読み聞かせ」において中心的なものだった「読み手(=保護者)と聞き手(=乳幼児)の情緒的な交流」は、3歳頃から、「絵本の言葉・内容への聞き手の関心」へと関係的に変化したものとなっている。

おはなし会に参加することで、家庭での読み聞かせや子どもとのかかわりにどのような影響が見られたかについて、子どもの年齢段階とアンケート項目でまとめたものが、表10である。複数回答が可能な質問で、年齢段階に応じて、アンケート項目ごとの延べ人数とその割合を示している。

「おはなし会に参加することで家庭での読み聞かせにどのような影響があったかとおもわれますか」という質問について、表10から読み取れる点は、幼児の年齢段階を考えに入れずに見ると、全体的に、「図書館でよく絵本を借りるようになった」(21.6%)、「読み聞かせをする回数が増えた」(18.8%)、「わらべ

表 10 読み聞かせ活動への参加が家庭に与えた影響（人数 %）

| 年齢段階(◇歳；△か月) | 0;0～ 0;5 | 0;6～ 0;11 | 1;0～ 1;5 | 1;6～ 1;11 | 2;0～ 2;5 | 2;6～ 2;11 | 3;0～ 3;11 | 4;0～ 5;11 | 合計 |
|-------------------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|----------------|
| 図書館で絵本をよく借りるようになった | 2 (40.0) | 7 (19.4) | 8 (21.1) | 5 (16.7) | 4 (20.0) | 4 (25.0) | 5 (20.8) | 3 (42.9) | 38 (21.6) |
| 絵本を買うようになった | 0 (0.0) | 3 (8.3) | 6 (15.8) | 3 (10.0) | 0 (0.0) | 1 (6.3) | 1 (4.2) | 0 0.0 | 14 (8.0) |
| 読み聞かせをする回数が増えた | 1 (20.0) | 9 (25.0) | 6 (15.8) | 5 (16.7) | 3 (15.0) | 3 (18.8) | 5 (20.8) | 1 (14.3) | 33 (18.8) |
| 読み聞かせの技術が高まった | 0 (0.0) | 1 (2.8) | 1 (2.6) | 1 (3.3) | 1 (5.0) | 0 (0.0) | 1 (4.2) | 0 (0.0) | 5 (2.8) |
| わらべ歌を歌ったり、手遊びをする回数が増えた。 | 1 (20.0) | 9 (25.0) | 5 (13.2) | 11 (36.7) | 4 (20.0) | 2 (12.5) | 3 (12.5) | 1 (14.3) | 36 (20.5) |
| 家族も読み聞かせに関心を持つようになった。 | 0 (0.0) | 2 (5.6) | 2 (5.3) | 1 (3.3) | 2 (10.0) | 1 (6.3) | 3 (12.5) | 1 (14.3) | 12 (6.8) |
| 家族も読み聞かせをするようになった | 0 (0.0) | 4 (11.1) | 4 (10.5) | 0 (0.0) | 2 (10.0) | 2 (12.5) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 12 (6.8) |
| お子様との会話・やりとりが増えた | 0 (0.0) | 1 (2.8) | 3 (7.9) | 3 (10.0) | 3 (15.0) | 2 (12.5) | 3 (12.5) | 1 (14.3) | 16 (9.1) |
| 数回参加したが、分からない | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (5.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 1 (6.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 3 (1.7) |
| その他 | 1 (20.0) | 0 (0.0) | 1 (2.6) | 1 (3.3) | 1 (5.0) | 0 (0.0) | 3 (12.5) | 0 (0.0) | 7 (4.0) |
| 合計 | 5 (100.0) | 36 (100.0) | 38 (100.0) | 30 (100.0) | 20 (100.0) | 16 (100.0) | 24 (100.0) | 7 (100.0) | 176 (100.0) |

歌を歌ったり、手遊びをする回数が増えた」(20.5%)ことが挙げられる。

実際、おはなし会は図書館で開かれているため、おはなし会に出て図書館で保護者が絵本や児童書を手にとって眺めている光景をよく目にする。図書館で絵本を借りる機会が増えれば、家で読み聞かせする回数も多くなっていくことが分かる。さらに、わらべ歌や手遊びは、おはなし会の重要レパートリーになっていることから、家に帰ってからも取り入れる保護者も少なくないと考えられる。他方、気になる特徴としては、「絵本を買うようになった」という回答が非常に少なかったことである。おはなし会に参加し、図書館で絵本を借りていくが、絵本を購入することにはつながっていないことが、ここからはっきり読み取れる。

表9から読み取れることで、強調したいことは、1歳代から2歳代までの「読み聞かせ」において中心を占めていた「読み手(=保護者)と聞き手(=乳幼児)の情緒的な交流」は、3歳頃から、「絵本の言葉・内容への聞き手の関心」へと関係的に変化したものとなっていることである。

こうした中で、絵本そのものに対する捉え方、その意味合いも、子どもの中で大きく変容することになる。子どもにとって絵本は、「単に目の前にある物=物体」ではなくなり、「表現された文化財」へと徐々にその意味づけが変わっていくのである。その意味で、0歳児における「好きなページをじっと見ている」ことや0歳から2歳代までに現れる「自分でページをめくっていく」という行動は、徐々に「絵本の表現・内容」に関心が向かっていくための移行段階・準備段階と見ることができる。したがって、乳幼児を主に対象としたおはなし会あるいは家庭での読み聞かせは、こうした移行段階・準備段階に対して、時間をかけて豊かに支援する場となっていると考えられる

表10からは、おはなし会に参加することで、家庭での読み聞かせの回数やわらべ歌・手遊びをする回数をはっきりと増えたことが分かる。また、おはなし会は、公共図書館の一角を使って行われるため、保護者が多くの絵本を閲覧したり、借りていく機会を保障することにもなり、この点も家庭での読み聞かせを大きく支える要因となっている。

IV. まとめ

本稿では、4つの図書館の読み聞かせに参加されている保護者へのアンケート調査により、保護者の読み聞かせに対する意識と家庭での読み聞かせの実態を分析した。その結果は、次の通りである。

- ①読み聞かせへの参加の契機は、「図書館の発信する情報」が最も多い。「ブックスタートでの紹介」も図書館での読み聞かせ活動に対する保護者の認知度を高め、きっかけとなりやすい。
- ②保護者が読み聞かせ会に最も期待していることは、「子どもが絵本を好きになること」であった。保護者と子ども、子ども同士、保護者同士の交流を求める声と、絵本の読み聞かせ体験による子どもの育ちを期待する声があり、図書館ごとに違いも見られた。
- ③図書館の読み聞かせへの参加者は、もとより絵本の読み聞かせやわらべ歌、子守り歌、身体遊びに関心が高いと推察され、家庭でも頻繁に実施している。
- ④家庭での読み聞かせに図書館の絵本を「半分程度」まで使用している者は約6割存在し、図書館ごとに使用傾向が異なる。「初めて」の参加者に比較してリピーターは図書館の絵本を使用している。
- ⑤読み聞かせ参加者は他者から勧められた絵本よりも、子どもの現在の実態にあった絵本を選定する傾向がある。その際には自ら目にしたり手に取ったりして確認のできた絵本を選定していると推量される。
- ⑥1歳代から2歳代までの「読み聞かせ」で中心的な「読み手（＝保護者）と聞き手（＝乳幼児）の情緒的な交流」は、3歳頃から、「絵本の言葉・内容への聞き手の関心」へと関係的に変化している。子どもにとって絵本が、「単に目の前にある物＝物体」から「表現された文化財」へと徐々にその意味づけが変わっていく。
- ⑦読み聞かせに参加することで、家庭での絵本の読み聞かせの回数やわらべ歌、手遊びをする回数が増えたと答えた保護者は2割程度いる。
今後、公共図書館における読み手は、読み聞かせ活動の意義をどのように捉え、何を心掛けて読み聞かせをしているのかを検討し、考察を深めたい。

謝辞

調査にご協力くださった図書館職員の皆様、読み手としてご活躍されているボランティアの皆様、読み聞かせに参加される保護者の皆様、子どもたちに心より感謝申し上げます。

注・文献

- 1) 文部科学省 (2017) : 幼稚園教育要領, フレーベル館, 20.
- 2) 横山真貴子・水野千具沙 (2008) : 保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義—5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から, 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 17号, 41-51.
- 3) 西坂小百合・篠沢薫・権藤桂子 (2014) : 幼稚園・保育所において絵本はどのように扱われているか—保育者への活動実態・意識調査から, 絵本学会研究紀要『絵本学』, 16号, 37-44.
- 4) ブックスタートは、0歳児健診などの機会に、行政と市民が連携して行う子育て支援活動である。子どもと保護者は、絵本をひらく楽しみを体験する。1992年にイギリスで発祥し、日本では2001年から開始され、2020年10月31日現在は1065市町村で実施されている。(NPOブックスタート, <https://www.bookstart.or.jp/>, 2020年11月26日情報取得)
- 5) 原崎聖子・篠原しのぶ・彌永和美・渡邊晴美 (2016) : ブックスタート経験が保護者及び児童に与える影響—小学6年時追跡調査, 福岡女学院大学紀要, 17号, 61-68.
- 6) 梶浦真由美 (2011) : 北海道恵庭市におけるブックスタートの検証—母親からの聞き取り調査を通して, 絵本学会研究紀要『絵本学』, 13号, 49-56.
- 7) 板橋利枝・田島信元 (2013) : 「歌いかけ・読み聞かせ」による母子相互行為が母親の育児意識・育児行動に及ぼす影響—「Baby Kumon」プログラムの意義と効果, 生涯発達心理学研究, 第5号, 125-135.
- 8) 板橋利枝・田島信元・小栗一恵・佐々木丈夫・中島文・岩崎衣里子 (2012) : 「歌いかけ・読み聞かせ」実践が母子関係の発達に及ぼす影響—KUMON「こそだてちえぶくろ」プログラムの意義と持続的効用, 生涯発達心理学研究, 第4号, 89-104.
- 9) 「数日に1回」と「週に1回程度」を合算して「週1回以上」とし、「毎日」と「週1回以上」の相関関係を調べた結果、参加回数と実施頻度の相関係数は0.50で正の相関があった。